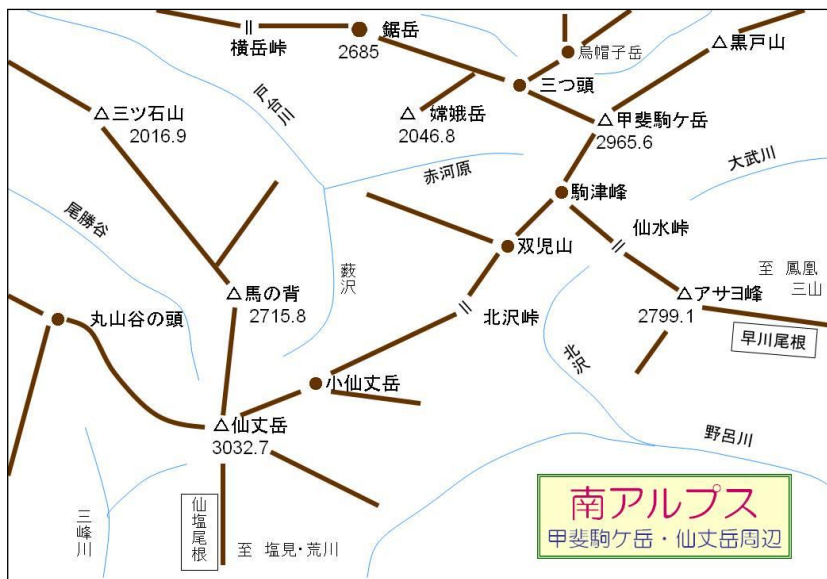


南アルプス	赤河原から 甲斐駒・仙丈ピストン	No. 047
-------	------------------	---------

秩父から、大菩薩から、帯那山から、鳳凰から、入笠山から……何度となく眺めてきた一度見たら忘れられない特徴のある頂。中央本線が明け方の甲信国境を走る頃、誰もが窓辺に額を擦り付ける山、甲斐駒ヶ岳。

甲斐駒を男性にたとえるなら、いつも優雅に寄り添う仙丈ヶ岳を女性にたとえざるを得ない。仲むつまじい夫婦を思わせるおもむきがあるが、この夫婦は妻の方がわずかに背が高い。甲斐駒ヶ岳は2965.6 m 仙丈ヶ岳は3032.7m。いや、高さの問題ではなく見ただけで登ってみたいくなる味わいのある容姿である。



昭和 40 年 5 月 27 日

新宿23時00分発急行第二白馬(信濃森上・糸魚川行)で出発。急行列車で山へ行くのはこれが初めてだ。木曜日の晩とあってガラアキ。誰と待ち合わせるでもなく気軽な一人旅。昨日台風が去ったばかりで天気はこれから悪い方向には向かわないと思うが、出発時の曇天ほど不安になるものはない。まずは運を天にまかせて、眠りに入る。

昭和 40 年 5 月 28 日

目が覚めたら岡谷、危なく乗り越すところだった。あわてて靴を履き、身支度を整えているうちに辰野駅に到着、4時37分。飯田線に乗り換える時はまだ曇り空だったが、伊那北駅では小雨になってきた。伊那北駅に下りた登山客は数人。駅前の早起きの八百屋でパンと牛乳を買って朝食。その後到着した何本かの列車から降りてきた登山客は、数えるところ10人を超えてしまった。平日とはいえ好きな奴もいるものだし、暇なやつもいるものだ。バスは6時27分発。伊那谷の城下町高遠を通り、三峰川(みぶがわ)を遡って走っていく。約一時間半バスに揺られて戸台に到着した(7時54分)。意外な事件が待ち構えていた。台風で戸台川が増水したため、河原の道は使用できなくなったということで、不安な表情の登山客が15.6人ほどどうろうろしている。中には、なんとかなるだろうと昼寝をしている者もいるし、小黒川から入笠山……などと旅の代案を考えているパーティもいる。私自身もそうだが、ここまで来てみすみす諦めて帰るなんてできるか、と地図を睨んでウンウン唸っているやつもいる。引き下がりたくない。キスリングを置いて偵察に行ってみると、赤茶色の水がどうどうと流れ、いつもなら広い河原の片隅に幅1mほどの流れがあるだけの戸台川は、幅広い濁流になってしまっている。しかし、何度かの渡渉を覚悟するなら行けないこともなかろう。しばらく手持ち無沙汰な時を過ごすうちに、数人のパーティが山を下りてきた。様子を聞いてみると、丹溪山荘のおじさんが川の左岸の藪の中に小さな切り開きを作ってくれたという。何とか行けそうな感じが漂ってきた。前進決定! 10時50分に戸台を出発。最初の徒渉地点で昼食(12時30分~13時05分)。三度ほど渡渉したのだろうか。その都度脱いだ靴を首に掛けて、ズボンは太もものあたりまでたくし上げて、ピ

踏み跡 < My mountains >

ツケルで水底をまさぐりながら。時々足の裏の石が流れに転がっていく様子がわかる。冷たい雪解け水を出ると、足は赤く腫れたようになり、しかもコチコチに硬直してしまう。

すぐ後ろを外人一人を含む四人のパーティが、そしてその遙か後方にやはり数人のパーティが続いている。どうやら意を決して登ってきたのはこれだけらしい。このコースは近年一般化して(南アルプスでは最もポピュラーな)、随分色々な人が押し寄せるようになったそうだ。だが、例えば今日のような場合に強行できるパーティは少ないのだろう。

赤河原の丹溪山荘に着いたのは15時40分、海拔1451mの谷間にはもう夕暮が近づいていた。戸台から約三時間の行程といわれるこのコースを、今日は約五時間かかった。計画では今日は北沢峠まで入るつもりだったが、冷たい沢の渡渉を繰り返しながら登ってきてかなりの疲労が残ったので、今日はここまでとする。ここを拠点にして、明日から甲斐駒・仙丈をピストンすることにした。外人を含むパーティもすぐに小屋に着いた。その後ろにいたパーティは峠まで登ったのだろうか、小屋には入って来なかった。

小屋のおじさん(上島四朗氏)が、取れたてのヤマウドのマヨネーズあえをご馳走してくれた。

外国人を含むパーティと食糧を出し合ってカレーライスを作ることになった。このパーティは、上智大学の助教授でスペイン人のソペニア先生とその教え子たち三人。三人の生徒たちは習いたてのスペイン語で何やら先生をからかい、先生は片言の日本語で「ソレチガイマス」と言ってスペイン語で言い直している。楽しそうなグループですっかり打ち解けることができたが、日本語とスペイン語が入り混じった会話にはまったく閉口。

ソペニア先生はヨーロッパの山、特にフランス・スペイン国境の山はほとんど登ったそうで、日本の山にも相当の興味を抱いておられる。先生の夜はすごい。パンツとアンダーシャツだけになって寝袋に入る。三人の生徒達の中にはヤッケまで着込んで寝る人もいたというのに。明日も明後日もこのメンバーと一緒に歩くことになった。外は大粒の雨、19時30分就寝。



昭和40年5月29日

起床4時、雨は止み曇り空。コンビーフ入りのラーメンを作ってラーメンライスの朝食。6:00に行動開始。

北沢峠7時10分、双見山へのルートをとる。秩父の原生林のようなところの急な登りだが、時々残雪の上を歩くようになると間もなく樹林帯を飛び出し、風を受けるようになる。

駒津峯(2752m)10時、峠から三時間とまずまずのペース。おやつを食べて小休止。駒ヶ岳はもう目の前まで来た。食事をする間にも、白い花崗岩の頂はわずかな雪を付けた姿を、ガスの間に見せてくれる。アサヨ峰がガスの中に霞んで見えるが、その向こうに見えるはずの北岳は姿を見せてくれない。明日登る予定の仙丈も同様隠れっぱなし。

六方石の悪場を通過し、本峰の腹に取りつき、ところどころに残った小雪田をトラバースして、摩利支天との鞍部に飛び出し、わずかな登りで2965.6mの甲斐駒ヶ岳に到着11時40分。厚い雲の中で遠望は全く得られないが、12時30分迄昼休みとする。葎崎から登ってきたパーティが二組ほどいたがすぐに下って行き、頂上は私と上智大学の四人だけになった。記念撮影をただけで軽食を取りながらの雑談。

下りは駒津峯13時15分、仙水峠(2264m)13時40分、北沢の雪渓で遊んで、北沢峠に15時10分。

途中で俄雨に遭いはしたが、16時に丹溪山荘に帰着。

今夜も他に客はいない。上智大学のパーティーと合食。生徒の三人は、クリスチャンである先生に何とかしてバコを吸わせようとして、日本語とスペイン語を混ぜ合わせて大騒ぎしている。20時15分就寝。

踏み跡 < My mountains >

昭和40年5月30日

起床4時10分、出発5時40分。今日は仙丈ヶ岳アタックの後下山しなければならない。戸台川の下りで入山時のように長時間を要すると、バスに乗り遅れる可能性がある。

そのため、「9時半に頂上を踏めない時には、そこであきらめて下山する」というプランにした。

二合目7時10分、四合目7時40分と順調な滑り出し。四合目で温度計を見たら気温は4℃だった。

朝は曇り空だったが、7時55分大滝の頭あたりまで来ると雨が降り始めた。ソペニア先生の足はすこぶる快調、他の追っ手の足は雨で遅れ勝ち。小仙丈(2864m)を過ぎてしばらくのところタイムリミットの9時半を過ぎてしまったので登頂を断念。おそらく後30~40分ほどで頂に立てたとは思いますが、雨で何も見えず何の期待も抱くことはできない。軽食を摂って10時15分まで休憩。

北沢峠11時37分、丹溪山荘に12時40分に帰着。二日間放置しておいたキスリングを引き出してパッキングし、下山前の軽い食事。上智大学の四人は今夜も小屋に泊まり明朝下山すると言う。

お世話になった小屋の上島さんとは次はいつ会えるだろうか。

四人組とは東京での再会を約し、13時25分下山開始。戸台川の水も随分治まってはきたが、まだまだ濁っている。順調に下ることができ、16時に戸台に到着。最終バスまで二時間も余裕がある。

伊那北駅行のバスは18時04分発。尾勝口を通る頃には空は晴れ始め、しばらくの間甲斐駒が見えていたが、やがて夕暮れに消えていった。飯田線は伊那北駅発19時05分。

辰野で遅い晩飯を食べて、21時49分発の夜行列車に乗った。のんびり入山して、時計を見ながらのせかせかした下山の山旅だった。

以上

(修正・更新:2023年10月)